



333 East 47th Street New York NY 10017 TEL 212 832 1155 FAX 212 715 1262 www.japansociety.org

<プレス・リリース>

プレス担当:

塩原邦子 (kshiobara@japansociety.org / 212-715-1249)

ホイル治子 (hhoyle@japansociety.org / 212-715-1223)

ジャパン・ソサエティー・ギャラリー企画

展覧会

New Bamboo ～竹の新世界～

プレス内覧会: 10月1日(水) 正午～午後2時

リスティング・インフォメーション

- 会場: JS ギャラリー
333 East 47th Street, NYC (at First Avenue)
- 展示期間: 2008年10月4日(土)～2009年1月11日(日)
- 開館時間: 火曜日～木曜日: 午前11時～午後6時
金曜日: 午前11時～午後9時
土曜日・日曜日: 午前11時～午後5時
月曜日・祝日(11/27、12/25、12/26、1/1)は休館
- 入場料: 一般12ドル、シニア・学生10ドル、会員・16歳以下 無料
毎週金曜日午後6時～9時は無料
- 展覧会の解説ツアー: 日本語 金曜日 午後6時より(要予約、日本語で212-715-1274 まで)
英語 火～日曜日 午後12時30分より
土・日曜日 午後2時より (所要時間は約1時間)
展覧会入場チケットをお持ちの方は無料

団体鑑賞に関するお問い合わせ: (212)715-1224

JS ギャラリーでは、今秋10月4日(土)から来年1月11日(日)まで、立体彫刻としての日本の竹作品に焦点を当てた世界初の展覧会、『New Bamboo ～竹の新世界～』展を開催します。ギャラリー・ディレクター、ジョー・アール監修による本展は、幅広い年齢層の作家23名による約90点を紹介。コンピューター・デザインを駆使した華奢な細工や泥の塊のような重量感のある作品、男女の顔を複雑な稜線で巧みに表現した彫刻など、いづれの作品も高い技法を駆使して仕上げられ、細部に至るまで創造性に溢れています。

展示はギャラリー内スペースに留まらず、本展のために制作された**川名哲紀**による大作、またその川名の作品に呼応した**スティブン・タラスニック**の作品がロビーを飾り、竹という素材を介して国境を超えた対話を繰り広げます。

近年企画された一連の竹芸展とは異なり、『New Bamboo』展では国際的な注目を浴びている日本の竹を用いた造形に着目、現在活躍中の作家とその彫刻作品に焦点を絞ります。次世代の作家の作品を幅広く集めた本展は、現代の作家たちが従来の作品を技法的に超えるようなものを作り出す一方、彫刻的な取り組みのために日用品として発展してきた従来の竹細工のもつ機能性を放棄し、竹の従来の限界をいかに超えたのかを検証します。彫刻やインスタレーション・アートの国際的な傾向を認識することで、「日本的であること」に斬新性が見出されていく中、本展で紹介される作品は、単なる日本人の美意識ではなく、様々な価値観が混合した現代における日本人の新たな体験を表しているといえます。

東アジアにおいて最も豊富な資源である竹は各地において独自の使い方がされていますが、日本では主な使用例として、実用的な竹箆が数千年にわたり作られてきました。竹芸品は16世紀以前には芸術品として認識されておらず、日本で竹工芸家が作品に自身の名を記すようになったのは1870年以降のことでした。現在、竹作品は主に熱心なアメリカの収集家に支持され、竹芸は技能と革新の黄金時代に移行したといえます。現代日本の竹も、絵画、彫刻、ビデオ、パフォーマンス・アートなどの表現媒体と同様、伝統ある分野で活動する上で作家が直面している圧力、また過去・現在・未来における独創性の緊張感を表現しているのです。

展覧会について

『New Bamboo』展は、JS1階のロビーから始まります。池の中に作られる**川名哲紀**(1945-)の作品は、本展のために JS が制作を依頼し、茶室の原点である「囲い」に着想を得て創作されたもので、『囲い』と名づけられています。勅使河原蒼風に師事した川名は、ニューヨーク植物園の『菊博覧会』(2007年秋)を含め、世界各国で大規模な作品のインスタレーションで活躍しています。

ロビー内の滝に沿って展示される一連の作品は、アメリカ人作家**スティブン・タラスニック**(1954-)の手によります。想像上の建築物を描いたデッサンで知られるタラスニックですが、最近では竹やシナノキを用いた作品に意欲的に取り組んでいます。自然の形状にヒントを得た西洋の建築的・工学的デッサンを根本とするタラスニックのアプローチは、生花に基づく川名の美学と興味深い対照を成しています。

展覧会は主会場のギャラリー内へと続き、『器から彫刻へ』『各地の巨匠たち』『個々の表現』『新たな行方』という4セクションに分かれて展開します。

ギャラリーの入口は、**松本破風**(1952-)による大きな花箆が飾ります。本作品は、最も影響力のある20世紀の竹工芸家・**飯塚琅玕齋**^{らうかんさい}が発達させた形状に基づき松本が本年完成させました。琅玕齋は

1950年代に彫刻としての竹の可能性に気づいた作家の一人で、入れ物と立体作品の両面を併せ持つ花籠を作ったことで知られます。松本の作品は、本展オープニング・イベントの際には、花籠として花が生けられ、その後は内側の水受け皿が取り払われ、伝統的な竹籠と機能性を持たない現代的な美との間の緊密なつながりを強調する立体作品として展示されます。

器から彫刻へという変遷は、**本間一秋**(1930-)とその息子・**本間秀昭**(1959-)の作品で始まる第1のセクション、『器から彫刻へ』でさらに検証されます。一秋は1965年以来彫刻的な作品に取り組むかたわら、同時に花籠編みの創作も続けています。一秋のリズム感あふれる曲線を描いた作品は伝統的な技法に深く基づいており、秀昭の作り出す優雅な形状からは昔ながらの様式から完全に離れたことが見受けられます。

続く『各地の巨匠たち』セクションでは、伝統的な竹工芸界に身を置く作家の作品を取り上げます。**八子鳳堂**(1940-)は、長年ランプの笠を作って生計を立てた後、国際的な傾向にほとんど影響を受けていない内面世界を表現する作風を追求する中で、割れた竹の独特の美しさを用いた大作に取り組み始めました。30年にわたって花籠のみを作っていた**鳥居一峯**(1930-)は、伝統的な陶器に刺激を受けて制作した立体作品を49歳の時に初めて展示しました。**藤塚松星**(1949-)は、家業の継承ではなく自身の選択によって竹作家となった一人です。その作品は伝統を重んじる人々からは抽象的すぎると考えられ、高級芸術に傾倒する人々からは機能的すぎると捉えられる傾向にありました。このような批判を受けたことから、藤塚は美的価値、技法、日々の生活での使用という点において相反する感情を持ちながら、扱いにくい素材である竹、個人的表現に不可欠な手段としての竹を用いた創作に献身的に打ち込んでいます。人間国宝・**生野祥雲齋**(1904-1974)に師事した**山口龍雲**(1940-)は、波の形状に刺激を受けて作った無着色の竹作品や、端と周りを籐編みで止めた細い割竹を用いた作品を得意としています。祥雲齋の息子・**生野徳三**(1942-)は、最近になってようやく、作品の端は留めて仕上げなければならないという父親の主張から自己を解放させ、波立つような竹の海を形作るために上部を縛らずに残した、驚異的な作品を完成させました。大阪府堺市で代々続く竹芸一家、田辺家出身の**田辺小竹**(1973-)は母・**田辺光子**(1944-)と同じく、雑色の虎竹を編んで目を引く作品を作り上げます。

第3のセクション『個々の表現』では、従来の竹彫刻の限界を押し広げている二人の作家に焦点を絞ります。武蔵野在住の**池田巖**(1940年-)は、竹編みの家に生まれ、つやのある漆を何層も塗った竹の幹を打ち砕き、偶然の成り行きに任せた彫刻作品を作り出すという革新的な表現方法を好んで用います。**植松竹邑**(1947年-)は技術的な完璧さを追及するだけでなく、完成までに1年を要するほど精巧な大作を意欲的に作り出しています。近年では、細い竹片1240本の両端を結んで6メートルにもおよぶ2本の細長い束にし、それをねじって結び目としたダイナミックな作品を完成させています。本展では、クラーク日本美術・文化研究センター(カリフォルニア州ハンフォード)が近年収集した植松の代表作が初公開されます。

最後のセクションとなる『新たな行方』では、立体造形の創造に専念している若手の作家を取り上げます。ケネディー・センター(ワシントン DC)などでの戸外に展示される立体造詣を手がけてきた**川島茂雄**(1958-)は、規模の小さな作品においても同様に竹を風糸で縛る手法を用いて、興味深い作品を仕上げています。建築家出身の**上野正夫**(1949-)は、環境保護を重視し、他の手助けなく自分自身で忠実に育て、乾燥、処理を施した竹を、コンピューターでデザインした後作品に仕上げます。**長倉健一**(1952-)は頑強でたわむ竹の特質を生かし、驚くほどの技法で竹を制御することで人間の顔・体の形を表現したり、「生活の暗部を思い出させるもの」として絡まった竹の形に埃や漆を施した作品を

創作します。長い間アメリカの工芸界に身をおいた**米沢二郎**(1950-)の作品は、他の同世代の日本人作家とは異なる特徴を示します。米沢は竹と他の物質の組み合わせを躊躇なく試み、密に織られた高さ2.5メートルの筒状の『Red Heat Haze』(2004)などの巨大な作品にも挑戦しています。多くの作家が活躍する別府でも最年配の**本田聖流**(1951-)による立体作品は、未完成の花箆を熱湯で柔らかくし、練って形にしたものです。かつてトロンボーン奏者であった**三村竹萌**(1973-)はその本田の弟子で、複数の竹を混ぜて作品を仕上げることを避け、「竹も喜ぶように」との思いで各作品につき1本の竹の茎を用い、それを硬く手当たり次第に編んで、枕のような形の作品を作り上げます。**森上仁**(1955-)は、技術的な困難を乗り越え、六角形に編んだ薄く切った竹から連続した表面を形作ることで、極めて軽量で性的な雰囲気と称えた象徴的な作品を完成します。**中臣一**(1974-)は完璧に仕上がった三角形の部品から立体をなす、一見すると簡素な作品の創作を試みています。また、本展には、図録への掲載が間に合わなかった中臣の最新作も初出品されます。群馬県館林在住の**大木淑恵**(1976-)は、自身の初めての立体作品を『New Bamboo』展のために制作しました。人間国宝・飯塚小珣齋(1919-2004)の最後の弟子としての重責を担う大木ですが、最新の技法を用いて相互に作用しあう外面と内面を作り出した本作品からは、箆作家から彫刻家へと新たな展開を広げる自分自身の葛藤が現れているようです。

本展で取り上げる作家は以下のとおりです。

池田巖	上野正夫	植松竹邑	大木淑恵
川島茂雄	川名哲紀	生野徳三	田辺小竹
田辺光子	スティブン・タラスニック	鳥居一峯	長倉健一
中臣一	藤塚松星	本田聖流	本間一秋
本間秀昭	松本破風	三村竹萌	森上仁
八子鳳堂	山口龍雲	米沢二郎	

キュレーター

『New Bamboo』展は、2007年9月より JS のバイス・プレジデント兼ギャラリー・ディレクターを務めるジョー・アールが企画・監修しました。アールは英国・オックスフォード大学にて中国語と中国文学を学び、1974年よりヴィクトリア&アルバート美術館の東洋美術部門にて、日本美術およびデザインの分野を専門に手がけた後、83年に英国国立美術館史上最年少で、同館東洋美術部長に任命されました。91年、『Japan Festival 1991』で磯崎新によるハイライト企画、『Visions of Japan』展に携わったのち、主要美術館、オークションハウス、美術商のコンサルタントとして、日本、欧米において数々の展覧会企画を手がけました。2003年、ボストン美術館初のアジア・オセアニア・アフリカ美術部長に就任。在任中には、同美術館のために日本の竹彫刻作品を数点購入したほか、斬新な作品と伝統的な竹箆の両方を取り上げた展覧会を監修しました。

展覧会図録

ジョー・アールによる執筆で、JS より同名の展覧会図録が出版されます(128ページ、25ドル)。本展で取り上げる作家23名のうち20名のアトリエを実際に訪れて行ったインタビューに基づいた解説が含まれています。配本はエール大学出版局。

関連プログラム

こんにちは・フレンズ：ファミリー向けギャラリー・ツアー

10月～1月までの毎月第2土曜日 午後2時～3時 参加対象：2～4歳の児童と同伴保護者
『New Bamboo』展開催中、毎月第2土曜日（10月11日、11月15日、12月13日、1月10日）に家族向けの無料ギャラリー・ツアーを行います。JS スタッフ引率による本ツアーでは、作品を間近で鑑賞する大切さ、作品が持つ意外性などのテーマを探求し、ツアー後には参加児童の年齢に合わせたゲームやパズル、物語などのアクティビティーを通じてアートと文化に触れ合う機会を提供します。

『古代雅楽器：今日の響き』 10月10日 午後7時30分

雅楽を特徴づける代表的な竹製の楽器、笙・箏・篳篥・竈笛。本コンサートはこの3つの古典楽器のために作られた現代音楽に焦点を当て、日本を代表する雅楽演奏グループ「伶楽舎」の奏者を招いて行います。演目は、[雅楽器＋西洋楽器]のための各種アンサンブルで構成。神田佳子や藤枝守など日本の現代作曲家の作品に加え、JSでは3人のアメリカ人作曲家（ジーン・コルマン、ケン・ウエノ、カルロス・サンチェズ・グティエレス）に新作を委嘱しました。

『バンブーアート収集の魅力』 10月28日 午後6時30分

古来から竹工芸は日本の至る所で見受けられましたが、アートとして話題に上るようになったのは、最近のことです。本プログラムでは、ロバート・コフランド氏（バンブーアート収集家）と『New Bamboo』展キュレーターのジョー・アール（ジャパン・ソサエティギャラリー・ディレクター）が、現代アートとしての竹工芸を取り巻く環境、そして世界各国での収集状況について討論します。

『現代アートに生まれ変わる伝統工芸の技』 11月6日 午後6時30分

大阪府堺市で代々続く竹芸一家、田辺家出身の田辺小竹。日本の竹工芸の唯一の継承者として活躍する小竹が、竹細工という伝統工芸を、現代アートとしていかに斬新な視点で制作しているかについて語ります。

後援・協力

- ◻ 特別協賛
メアリー・グリッグス・アンド・メアリー・バーク財団
ダイアン＆アーサー・アビー、アレテ財団、コッセン学術研究振興財団、
エドワード＆アン・スタジンスキ、クリス・ワッケンハイム、国際交流基金、
TAI Gallery、マーサ・スチュワート・リビング・オムニメディア株式会社
『New Bamboo』展後援会
- ◻ 協賛
ニューヨーク市文化局、ニューヨーク州芸術協議会
- ◻ メディア協賛
WNYC、Louise Blouin Media
- ◻ 輸送協力
日本航空
- ◻ 準協賛
ライラ・ワレス・リーダーズ・ダイジェスト基金、JSギャラリー友の会
ヘンリー・コーネル氏（インスタレーション）、スペンサー財団（カタログ）

JS ギャラリーについて

当ギャラリーは日本と東アジアの伝統美術および現代美術を扱いながら、日本と東アジアを包括する新しい文化的視点を切り開いています。1971年以来、古典仏教彫刻、書画、現代写真、陶磁器、日本刀、輸出向け磁器、13世紀から15世紀の絵画など、広範囲にわたる展覧会を企画開催し、展覧会

図録の出版、講演会の開催とともに、さまざまな分野の美術を紹介しています。2008年からは、3ヶ月ずつ開かれる春・秋の展覧会に加えて、短期開催で小規模な夏期展覧会が追加されました。

近年 JS で開催された展覧会は、『YES オノ・ヨーコ』(2000)、『リトルボーイ:爆発する日本のサブカルチャー・アート』(監修:村上隆、2005)、『杉本博司 歴史の歴史』(2005)、『現代日本陶磁器』(主催:ボストン美術館、監修:ジョー・アール、2006)、『悟りの世界:中世日本における禅宗の人物および説話画』(JS 百周年記念行事、2007)、『柴田是真 - 鬼才の蒔絵師』(JS 百周年記念行事、主催:サンアントニオ美術館、JS、2008)など。

JS について

JS は、1907年(明治40年)にニューヨークに設立された米国の民間非営利団体です。全米唯一の規模を誇る日米交流団体として、100年間に渡って両国間の相互理解と友好関係を促進するため、多岐に渡る活動を続け2007年に創立100周年を迎えました。その活動範囲は、政治・経済、芸術・文化、日本語教育など幅広い分野にまたがる各種事業や人物交流などを通じて、グローバルな視点から日本理解を促すと同時に、日米関係を深く考察する機会を提供しています。今日、JS は日米の個人・法人会員をはじめ、政財界のリーダー、アーティスト、教育関係者、学生など様々な参加者を対象に年間100件以上のプログラムを提供しています。1907年の創立以来、JS が企画・開催した展覧会、舞台公演、映画上映会、講演、試食・試飲会、シンポジウム、国際会議、セミナー、ワークショップは数千件にのぼります。

###